

入中1年人権だより

徳島 八万中学校
1年生 第8号
2020年9月1日
編集・文 吉成正士

「戦争について考える」第1弾

今年の夏は、何やらとても変な夏になりました。まだまだ暑い毎日が続きそうですが、心も体もゆったりさせながら、空気がひんやりするのを待ちましょう。

さて、夏休みの宿題にしていた「戦争について考える」。みなさんに読んでほしい文がたくさん届きましたので、紹介したいと思います。

「つるにのって」を見て、僕はもう一度戦争について考えました。僕は小さい時に図書館に行って「はだしのゲン」を読んだのを思い出しました。幸せに暮らしていたのに、1発の原爆で家族を3人も失い、変わり果てた町や人の姿を見た時、とても衝撃を受けました。原爆が落とされた後も人が狂っていくところや、放射線で苦しむなど、人生をめちゃくちゃにされていくのを見てとても怖かったです。

どこで見たのか忘れたけど、戦争にいいも悪いもないという言葉を見たとき、確かにそうだなと思いました。戦争は悲しみを生むだけだと思いました。戦争に勝ったとしても、失うものは多いし、それによって悲しむ人もいます。戦争は悲しみしか生まず、二度と治ることのない傷を負うだけです。

8月は日本にとって大事な月です。その月が来るたびにもう一度戦争のことについて考え、みんなにもう二度と戦争をしないという思いを伝えていかなければいけないと思いました。 ST

* * *

私が戦争と聞いてまず想像するものは「原子爆弾」です。原子爆弾一つで何万もの生命が奪われ、町一つが無くなるほどの威力を持っています。原子爆弾一つでヒロシマもナガサキも大きな被害に遭いました。

私は「ひめゆりの塔」という映画を観ました。ひめゆりの塔の舞台は日本で唯一内地戦が行われた沖縄島です。特志看護婦として動員された二百余名の師範学校女子部と県立第一高等女子学校の女子生徒たちが、肉薄する米軍攻撃の前に、悲惨な最期へと追い詰められていくという話です。彼女たちは、そんな現在とはかけ離れた大変な時代に負傷兵たちの看護をし、仲間を心配し、自分の身を守り、米軍から逃げなければいけませんでしたが、何キロもある重いリュックを背負いながら、担架で人を運び、何十里もの道を歩くのは、今ではとても考えられないことです。そのようなことを、今の私たちくらいの年齢でしなければいけません。それでも彼女らは、生きることを決して諦めませんでした。私は何でもすぐに諦めてしまうので、見習わなければいけないと思いました。

私は被爆者ではないし、現在戦争だって起こっていないという、こんなにも恵まれた幸せな環境にいるとい

うことに感謝し、これからも二度と戦争を起こしてはいけないということを、後世にも伝えていかなければいけないと思いました。 YH

「戦争は絶対悪」という言われ方をします。戦争にいい戦争なんてない。戦争や争いでは本当の解決にはつながらないということです。勝敗はつきますが、それが本当の解決ではなく、勝っても負けても新たな憎しみが生まれるだけだということが、学ば学ばほどに分かってきます。

特に原爆のひどさは目を覆うばかりです。戦争ですから軍を攻めるならまだ分かりますが、原爆はその威力により一般市民を否応なく巻き込みました。しかも、何万発もの爆弾ではなく、たった1発です。何万人、何十万人もの人々を一瞬にして殺し、そのうえ何十年にもおよび被害を及ぼし続けるという点において、最悪の非人道的殺人兵器だったことがよく分かります。

また、部落差別の勉強をするときによく、「生まれる場所は選べない」と言われることがあります。それは、被差別部落の話だけではなく、徳島も東京も、中国も韓国もアメリカも、ロシアもアフリカも、どこも選べないということです。つまり、自分が勝つ側、負ける側、どちらに生まれていてもおかしくないということでもあります。

ひるがえって、「生まれる時代も選べない」とも言えます。たまたま戦争のない時代に生まれた。「だから良かった」では、あの時代を生きた人たちに本当に申し訳がありません。私たちは選んでこの時代に生まれてきたわけではありません。たまたま生まれたのがこの時代ただだけで、私たちには何の責任もありません。だから、何を背負う必要もないのかもしれませんが、私たちと、あの時代を生きた人たちは、必ずどこかでつながっています。とすれば、「何の責任もない」とは、口が裂けても言えないような気がします。私たちに責任はなくても、やはりあの時代を生きた人たちに思いを馳せ、今のこの平和な時代に生きる私たちができることを、精一杯する必要があるのではないかと思います。

「人にやさしくする」でもいい。「困った人を助ける」でもいい。「友達の輪を広げる」でもいい。「発表をする」でも、「何事も諦めない」でも、「掃除を一生懸命する」でも構いません。「不平不満や文句を言わない」もいいでしょう。とにかく、「あの時代、生きられなかった人の分まで懸命に生きる」という心持ちでいたいと思うのです。

あの頃生きた人々と同じくらいのエネルギーで、今私たちは戦争が起きないような行動できているか、この学びを生かすためにも、私たちはそんな生き方をしていく必要があるのではないかと思います。これらの文は、私をそんな思いにさせてくれました。

で私が見てきた日本の姿はごく一部だったと実感する日になりました。 ED

私は「つるにのって」という本を、前に読んだことがありました。その時の私は、「原爆って怖いな。アメリカの人たち、こんなことをするなんてひどいな」と思っていました。しかし、もとをたどれば、戦争をしだしたのは日本でした。

中学1年になり、また「つるにのって」というアニメを見て、私は、戦争をして一番被害を受ける人は一番無力な子どもや植物、国民なんだと考えました。そして、原爆の放射線の後遺症に今も苦しんでいる人がいるということを知りました。

私は、祖母から戦争について詳しく話を聞いたことがあります。祖母は戦争中、親戚の家に疎開したのですが、疎開先の暮らしはとても苦しく、大変だったと話していました。戦争が終わり家に帰ってくると、家はすべて焼けていたそうです。そしておばあさんの知り合いのおじさんは、自分の妻が空襲で焼け焦げて炭になるところを目の前で見たそうです。私はこの話を聞いたとき背筋がぞっとしました。私はこの戦争の話をまわりの人にも伝え、二度とこのような恐ろしい戦争を繰り返さないようにしていきたいと思います。 IM

* * *

徳島大空襲を受けた89歳のおばあさんに話を聞きました。「空襲警報発令」と町内放送があるとすぐに電気を消し、庭のコンクリートの小屋に隠れていたそうです。おばあさんはケガは負いませんでしたが、友達が焼夷弾に直撃したそうです。手に当たり、手が腐ったので、手を切断しました。しかし、今度は腕が腐ってしまい、腕を切断しました。それでもまた肩が腐ってしまい死んでしまったそうです。僕が毎日空襲におびえながら生活していくとなると耐えられないと思います。

広島原爆が落ちたとき、広島の人たちが安全な地を求めて逃げてきても、「ピカの毒がうつる!!」「来ないで!!」と差別しているのをテレビで見知りしました。ただでさえ家族を亡くしたりしてつらい思いをしているのに、そのうえ差別されるなんて、原子爆弾は人々を殺すだけでなく、その家族や親族にまでつらい思いをさせるのが分かりました。

僕はすごく平和な時代に生まれてきて、戦争の恐ろしさを知りません。僕たちの世代は戦争について体験者から話を聞ける最後の世代だと思います。戦争について理解し、これからの世代へとつないでいきたいです。そして二度と原子爆弾が使われないことを願っています。 KY

* * *

私は8月6日に放送されたNHKの番組を見て、本当に思ってもいない写真や本当にあった映像を見て、これが日本にあったのかと恐ろしくなり、少し目を背けようとしたけど、考えてみればこの貴重な瞬間を見なくてよいのか、先人たちの残したすべてを見なくてはいけないのではないかと、背けようとした目を戻して見ました。

テレビを見てCMに入ったときに母が、家に母の父の父が、戦争中に母の父へ送った手紙が母の家にあると言いました。母が覚えているところまで聞くことができました。私は少し考えてみて、やはり日本の過去にあったことは、話ではなく現実だったのだと思いました。今ま

戦時中の話を聞き、書いてきてくれました。本当に貴重な話です。ありがたくてありがたくて涙が出そうです。身近な人の話は、ワガコトのように聞けます。そんな思いで、知らない人のどんな話も、想像を膨らませながら聞ければと思います。

ただ、そんな被害者としての一面と同時に、加害者としての一面も学んでおかねばなりません。日本はその時代、朝鮮半島や中国、その他のアジア諸国に、大きな大きな被害を及ぼしました。ヒロシマ、ナガサキ、オキナワで受けた被害は大きいものでした。でも、それと同じくらい、いやそれ以上の被害を、アジア諸国に及ぼしたのです。そのことを知っておかないと、今も起きている韓国や北朝鮮、中国との問題も見えてはきません。

それと同時に、当時この国がどんなふうにならなかに戦争に突き進んでいったのか、そのときの国民はどうだったのかもじっくり見ておく必要があります。そしてそれは、今も、これからも、ずっと見ていかなければなりません。でないと、あのとき生きた人が残した教訓が生かされないことになってしまいます。となると、同じ歴史がまた繰り返されるかもしれないわけです。

今、私は、SNSの怖さを感じています。人を一方的に決めつけ、批判し、非難し、否定し、それに反論しようものなら、怒濤のごとく攻撃をされ、尊厳は傷つけられ、まるで人でないかのように言われたり、命の危険すら感じられるような事件も起こったりしています。いわゆる「炎上」というやつです。

戦前・戦中にSNSはありませんでしたが、物事を冷静に受け止め、判断できない状況はありました。そんな状況が、現代ではSNSを通じて起こっているように感じます。つまり、昔のことだと思っていることが、実は今、目の前で起こっている状況も、あの頃とそんなに変わらないことのようにも思えるのです。だとすれば、これはまずいです。こんなSNSの状況をエスカレートさせていく国や私たち国民になってしまえば、いずれまた戦争が起こりかねません。コロナ差別も、その現れの一つなのかもしれないわけです。

私たちは本当にみんなの心に響くような平和学習をしてきたのか、人権学習をしてきたのか、とふりかえる必要があります。やってきてはいたものの、やはりどこかヒトゴトのように見ていたからこそ、コロナ差別のような新たな差別を生み出してしまったのではないのでしょうか。

先人は、戒めとしてたくさんのメッセージを私たちに残してくれました。それをどう受け止めるか、それが私たちに試されているのだと思います。もし、私たちの子や孫の世代にも夢や希望をつなげたいなら、私たちは本当の意味で賢く進化していく必要があります。それは、どこかの誰かではなく、みんなの、あなた自身の問題なのです。

